

維摩会并東寺灌頂記(抄)

本書は廣橋家旧蔵本で、「岩崎文庫和漢書目録」にも載せられており、特に新資料というものでもない。その内容は美術史、建築史に関する興味ある資料を含んでいるが、寡聞にしてこれを利用した研究の

あることを知らない。

そこで紙数の関係から特に重要なと思われる養和

元年10月の部分のみを選んで、ここに抄録紹介したい。

本書は日野兼光の日記の維摩会部類記で、卷末には承安元年12月25日の東寺灌頂についての兼光記を合せ抄録している。その筆者は外題

にもあるように、兼光の孫で民経記の作者たる広橋経光と考えられる。

その体裁は巻子本で、書状の紙背を用いて書かれている。巻首は少々欠けており、現存巻頭の記の年月日は詳かでないが、講師堅義の名から安元2年10月と考えられる。以下治承元年より文治2年に至る毎年

および建久元年の各10月の維摩会に関する記事を集めている。この中

でも特に養和元年10月の部は記事が詳細で、特に建築・仏像については極めて具体的に記されており、内容的にも興味深いものがある。治承4年12月、平氏の南都焼討により興福寺は大部分が灰燼に帰したが、翌養和元年6月15日、興福寺司が置かれ、復興造営も緒につくことになった。この時造興福寺長官に任せられたのが日野兼光その人である。養和元年10月の記事が特に詳しいのはこうした関係によるものであろう。

本書はお茶の水図書館所蔵「養和元年記」と共に平氏の焼討後の興福寺復興造営を知る上で極めて貴重な史料である。

(前略)

養和元年十月八日辛亥、參殿下、以權弁被下大會文書
文書間事等、宣旨聽衆權弁書之、籠札紙内如何、先々挿結緒

敕、頭弁參会、暫談雜事、及晚退下、幡花鬢等以下大

會仏具等、臨曉可被送南都云々

九日壬子、依日次不快、曉鐘以前出京、有勞事所用小舟也、
勅使房未作間事等、亥刻許下着勅使房、依未作出、明日可移住之由、修理法橋

禪慶示送、仍借請寺僧小房寄宿、寺家并宿院司、任

例供給、今年當國兵旱兩難之上、造寺宿院之營

無他事之間、每事省略、主典咸言同所召具也、

十月癸丑、早旦以主典咸言、令巡檢食堂以下所々仮屋門
造営以後初度、亥刻許下着勅使房等、注文在奥、午刻、勅使房鋪設裝束了之由、
自寺家告送、仍着衣冠御大膳食參向、入東御門此門但未葺瓦、

如勅使房門等未作、着客第座、就旧跡、立五間四面板葺
屋一宇、鋪設裝束如前々、仍委不記、午刻許、別當法印
相具納所三人、令渡客房給、威儀師善勝、從儀師教経、
春経等、先候于弘庇座、次予蓋自北面弘庇方參

座也、然而依存家礼用此儀、次任例被補闕、請綱所等、
依召昇昇押上着座、予先披文書、取綱所先卷、下綱所、次
下上聽衆文、次下堅義長者宣一枚、并年分度者文、
皮宗言：綱榮家下文鋪閱傳

記、從儀師令補僧正故障替、次綱所退下、皆悉
已上三文予書之、書樣如常、次披宣旨聽衆書下文、仰注
俱書載造寺長官字、

記、從儀師令補僧正故障障、次編所退下、皆悉可補職也、然而
依可及數剗、兩三人之後、於閑所補之近例也、法印被仰云、
食堂以下如形出來了、可云希有、金峯山僧都蜂起之由、
三座不參聽衆、有其聞尤以不便、又大會剗很可能、三座不參聽衆、

必可補其闕之由、被仰綱所、其後令歸給、予下立西庭、今日禮儀、
別當退出、單門下力加事持印、文廿二年六月庚午朔合朔也、中興、故尚負麗、尚所

雨儀
催遲引之間、無左右參上東帶起、暫徘徊食堂東檐之處、
食袍 (班)

余雷頻灑、似無便宜、仍入堂中且巡禮、御仏并堂壯嚴幡
花鬢高座床仏供行香机以下仏具等講堂料、長者殷令

調儲給、而彼掌遲引、仍昨日先被奉渡、每事尽善、不可
尽、錦幡飄風、珠蓋瑩露、御仏阿彌陀仏釋迦院本仏、賴助

觀音勢至、借用往生院、頗不用心、強非聖跡、四天堂不慮事、莫出來之時、

可用此天等、云寸法、云其内多門天驗給、淨名文珠今度長者殿合奉新造給、院尊造之相好不違云々

頤宗開眼先例事
別當令開眼，頤宗開眼永承東金堂例也。

記、秉燭之後、別當法印、權別當僧都、覺憲、僧都範玄、

法眼雅縁、律師常範、法橋勝詮、惠範以下、就上階仮屋、

雨儀 次左右相分參進、衆僧前左有官右下官、依雨儀、經壇上、其後義、口列、乃名之、講而竟事、聞者東大寺已講明正

了退下、及深更、始夕座、天晴月明、夕座儀如常、探題別當法印、精義東大寺理真已講、堅者專寺尋曉、曉鐘以後

事了退下、堅者存例來臨、
講堂九尊外、金堂簪中銀弘、奉籠章子張中、奉安

食堂東第三間云々、御前供、大仏供等、試經日料也、康
良田等列印比、食堂云々、三見者、雜皮臺、

未奉終其功之上、康平例、不奉居食堂本仏、仍今

度不忘沙汰 食堂雖半作 此會猶留當寺 隨喜之
淚時雨不休、

別當法印令住一乘院給、如形屋両三字、被造立云々
今日幸範律師來談造寺并大會可被行事等慶、

又上座法橋進慶來、國々庄園会料米遅引之由、所令
款語也、

興福寺内維摩会所^所告^并燒錢堂^房舍^等事

合

食堂一字七間四面，但未張捲，飯幕

講師房 中室 路南端室

上階馬道代食堂後立之

五間三面仮屋一字

二間仮屋一字代庵

喜多院内二間一面堂一字

已上大法師義註

五間三面房一字

勅使房本跡立之

五間四面仮屋一字

四間仮屋一字

西院内五間三面房二字衆慶心

瑞瑠房三間三面房一字恩智

維摩会雜役屋等廿五間本跡立之

二間仮屋等本跡立之

方屋一字五間二面本跡立之

二間仮屋等本跡立之

北政所但相違先例可法云々

鐘樓一基二間仮屋等

諸門

有官宿房本跡立之

五間仮屋一字

東御門半作未葺瓦

西御門造不候丹

東院四足不立屏

西御門造但不立

一乘院

五間二面松皮屋一字

四足一字

五間一面松皮屋一字

一私造營

六間三面房一字大法師

松院内六間三面房一字大法師

六間三面房一字大法師

角院内六間三面房一字大師

四間三面房一字崇善

建院内四間三面房一字西金堂

衆善堂

伝法院内四間二面房一字覺泉

東洋文庫所藏維摩会并東寺灌頂記抄

養和元年十月十三日 主典右衛門少志中广咸言
十一日甲寅、吉野惡僧可亂入国内云々、仍僧綱以下、參進
吉野惡僧事
禪定院群儀云々、申剋始朝座、範玄、勝證不着座、夕座
十二日乙卯、早旦參東大寺、奉禮大仏、悲淚憇襟、非言之所
及、申剋始朝座、雅緣法眼以下夕座如例、堅者円長分前
皮剋始行、別當法印探題給堅者範慶、一問理真及五
參東大寺
長慶嚴鈞時
請定云々、探題精義如日來、堅者不來、若依他寺之
分數、
十三日丙辰、円宗慶房沐浴、朝座攝別當以下事了、參一
於宗慶沐浴、朝座攝別當以下事了、參一
東院、令出塗給、數剋詭難事、給夕座如例、一問參慶堅者
參一乘院頼
者東大寺探題法印御房、云表白、云精義、甚以優美也、
雖受貴種、未必兼、材幹雖富才名、未又兼、所仰之天骨、

參一乘院長慶堅者
者東大寺探題法印御房、云表白、云精義、甚以優美也、
雖受貴種、未必兼、材幹雖富才名、未又兼、所仰之天骨、

誠是法相一点之証也、可貴々々、乘慶聊有表白、

御表白

夫維廣大会者、國家第一之御願、我寺嚴重之勝事也、

已余于五百歲、全滿于四十代、

爰去冬、當塔僧房佛像經典、威盛為灰燼、聞之者、皆拭

紅淚、況於一寺之諸德兮、見之者、各勞丹心、況於小

僧之微情兮、僅殘經卷モ、憂情切以不提作、乃適

留章疏モ、落淚深以不鑽仰、然而悅旧風之興行モ、

鑽定今日之得略許也、

十四日丁巳、早旦向信宗已講房、令小浴、其次多武峯善範筆

不空窮索一鋪、奉迎之、申剋朝座、法眼雅緣以下、

參会、外座堅者東大寺、探題如去夜、一問隆英已講、

五重一問、三重三問、三重四問、一重五問、一重到一問、精義

如此之間、鶴鳴事了、御月忌間事、宗一所注送也、

次郎次郎冠者、只今所歸來候也、

今度大會、無事被遂行候、偏御一身之冥加之由、令存候、

吉野無為之案、又以為悅、紀伊國追討使下向、相尋早可申

南部之由、度々申助頼之許了、此辺ニ定說不承得候之故也

抑一乘院番論義、勅使座モ屋母の東第一問ニ横敷之

西面也、如然事、一事已上可令隨寺家所為給、不似京都事

候歟、空僧正御時、存宗礼執盃令獻了、頻不可然之由候し

かとも、勅使房にてハ不可候歟、從御時ハ渡勅使房

之時、令退帰給云々、今度ハ下立砌下之様ニ貰候、

自妻戸モ、不出入之様ニ貰候也、何様モ今度

事ハ以無為可為先歟、

不例人、自昨日為滅、昨今ハ殊宜令坐給云々、神妙候、御

上洛在近、帰洛ニ令渡給事、不可然、今ハ大乘会以後、心閉ニ

可令入給、

真如院法眼遺墨叙述法印、

以上感可為辭退所職之由、自京今日所注遣候也、其外

別事不候歟、不具謹言、

十月十四日成時

一

十五日戊午、早旦、當講尊來、相具座具等、予出逢会

講師參入事 講師入事
積午一点共事具之參由、參堂別當法印以下數輩參入、

次第如恒、暫律同奉奉、即催夕座、依無堅義日也、恒例

御食堂 前請事 律如次夕座事了、向試經所、其儀如承德中右記儀、但食堂

前當東第二間前庭、立三丈帳一字佐色其內東西立

前請事 屏風敷弘延、其上敷高麗帖、一如金堂前庭、前西南二面

引二色幔、其後法印令着東西座給、予又着西面座、

次試經儀如恒、仍不委記、証師打磬、先々綱所可打之由、

五師下知太不当事也、入夜番論義事相具了、可參向之由、以中綱被示遣、仍着東帶參向共傳 〔源松前行并役同歸前行

出勅使房門、西行入自一乘院南門新道北行昇于午廊

一乘院番論義事 南庇、西面階入南面戶、北行着南面座小揖、

北第一間戸前母母南面敷高麗帖一枚、并円座、為弁
座、其前居饋如例、同第二間、西面敷座為別當以下僧綱

已講座、同第五間西寶子構仮床、為有官別當座、南弘

庇敷論匠座北面 上、各居饋庭上、擎篝火、寺

職掌等着褐衣冠、奉仕之、聽聞頭裹濟々焉、但比

先例十一也、

先是権別當僧都算憲、範玄、法眼雅緣、口講乘慶

等、着座論匠、又然、次別當法印着座給、予聊勤座、僧徒

皆如此、次六位別當着座、次一獻、予雖請口、為恒例可取

家札勸^事之由、有別當御命、予愍取之、起座奉擬別當、從僧等

二獻別當^事被送、次第巡流、有官別當別坏、次二獻別當^事、三獻

予奉擬法印如前、次已講乘慶、立切燈台、置紙筆、

即書結文實、別當法印僧綱次第見下、次乘慶表白

其詞^之不記之、次召論匠^宣、次第巡流、有官別當御命、

被奉別當^事、次第巡流、有官別當御命、次召論匠^宣、次第巡流、有官別當御命、

次第巡流、有官別當御命、次召論匠^宣、次第巡流、有官別當御命、

被奉別當^事、次第巡流、有官別當御命、次召論匠^宣、次第巡流、有官別當御命、

予私相語繪師、奉書始三笠山并南円堂形像、為本

為太尊^事三笠山并南円堂形像事、禮也、

十六日己未、別色之間、仰院別當、令打衆会鐘、日出之後參上、

日出後參上事、於上階代砌、衆僧列參進儀如恒例別當法印、律師常禮、惠滿、法眼、行香僧綱舉了、

向講師^事、改禮其後議^事以如例、仍不委記、行香僧綱舉了、

其後予向講師房三拜^事、改禮、行香僧綱舉了、行香僧綱舉了、

向供食所^事、改禮、行香僧綱舉了、行香僧綱舉了、

次向供食所之間、於食堂巽角、別當法印令舉申、明年

細殿舉、改禮、行香僧綱舉了、行香僧綱舉了、

講師^事、改禮、行香僧綱舉了、行香僧綱舉了、

立七丈幢^事、改禮、行香僧綱舉了、行香僧綱舉了、

改衣裳、此間憲清寺主為法印、御使來臨、講師付論義二卷、

付後卷、改禮、行香僧綱舉了、行香僧綱舉了、

偏舟也、亥剋着鳥羽之間、南海征討使為盛朝臣下向、予

於西川原方避誘令過歟、深更帰宅、予大會勅使

勅仕由、以六ヶ度也、而相逢當舍灰燼之時、雖失面目、

適挑法燈之^事、更達齋席之中興、是又非無小緣乎、

十七日庚申、參殿下、進後卷、被仰云、後卷試經堅義

持院參奏事、改禮、行香僧綱舉了、行香僧綱舉了、

文可奏聞、氏人見參、可給外記者、僧綱舉、細殿舉、

講師論義等、留御所、其外申條々事、又參旧院、謁通業

并公胤等、懷旧之淚、追時無訖、以當講靜嚴、可補阿弥陀

堂供僧之由、被仰下、其理相當、尤以可然、

(後略)

(田中
稔)